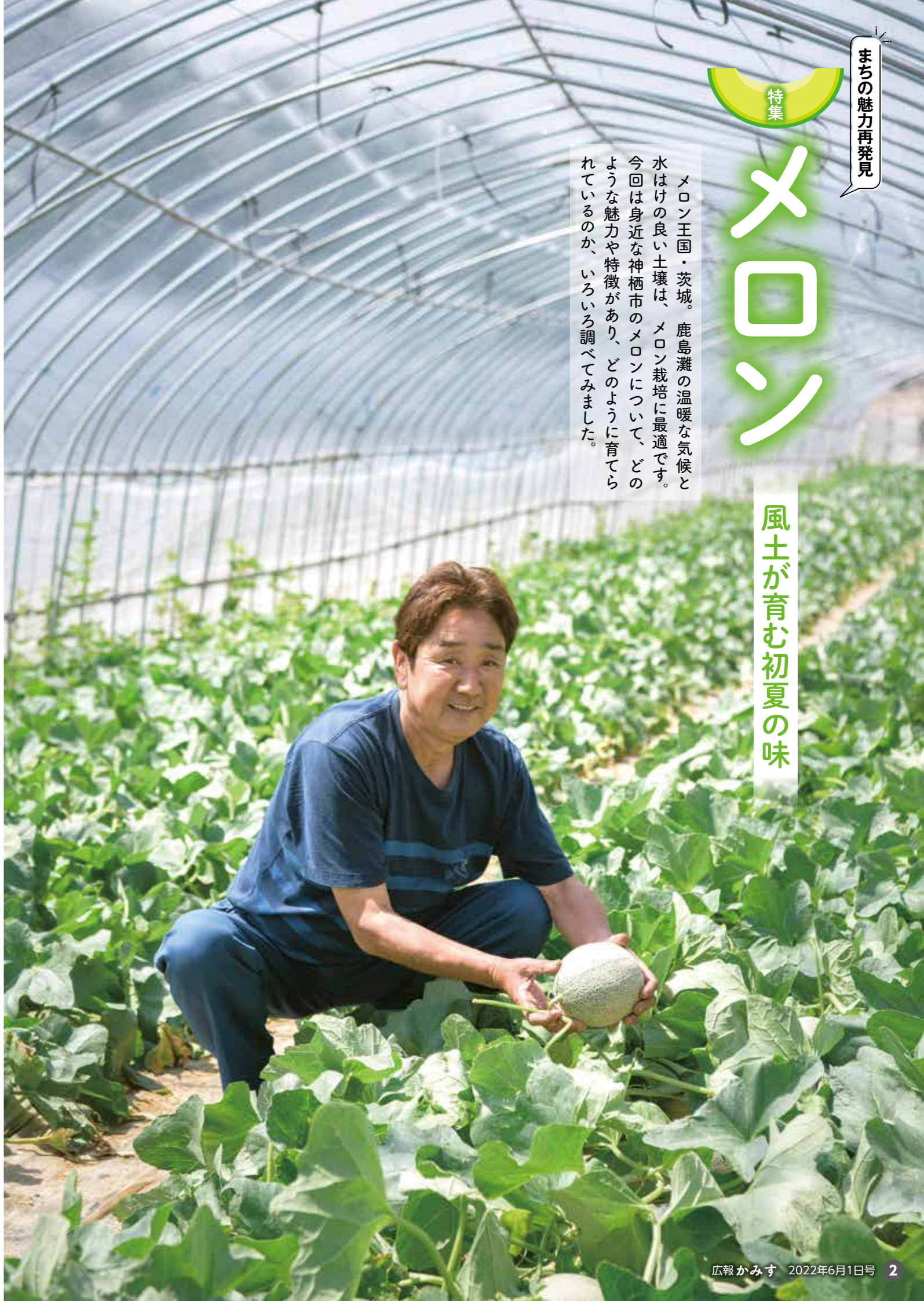


特集

メロン

風土が育む初夏の味

メロン王国・茨城。鹿島灘の温暖な気候と水はけの良い土壌は、メロン栽培に最適です。今回は身近な神栖市のメロンについて、どのような魅力や特徴があり、どのように育てられているのか、いろいろ調べてみました。



神栖市は県内有数のメロン産地

メロンは華やかで高級感のあるフルーツ。甘い果汁が口いっぱいになると、幸せな気分になります。茨城県はメロンの一大産地、23年連続で日本一の生産量を誇っています。4月から10月にかけて、アンデス、クインシー、タカミ、アールス、イバラキング、オトメなどさまざまな品種が次々と出荷され、6月前後に出荷のピークを迎えます。そんなメロン王国・茨城で、神栖市の出荷量は県内4位、全国でも24位という堂々たるメロン産地です（農林水産省「作物統計調査(野菜)平成18年産野菜生産出荷統計」）。

春メロンと秋ピーマンを交互に栽培

神栖市の農業を振り返ると、かつては米、麦、サツマイモ、落花生などが中心でしたが、昭和40年代の鹿島開発を境に施設園芸が盛んになり、ビニールハウスでピーマン、スイカ、メロンなどが作られるようになります。当時は、同じビニールハウスで春にメロン、秋にピーマンを交互に栽培する農家が多かったようです。JAなめがたしおさい波崎メロン部会の部会長を務める田内一郎さん(右写真)は、メロン栽培のあゆみを次のように語ります。「メ

ロン部会が発足したのは約40年前。最盛期には会員が80人いて、1日1万ケースも出荷した時期がありました。しかし、暖房設備のあるハウスでピーマンの周年出荷ができるようになりますと、メロンをやめてピーマンに集中する農家が増えたんです。そのため現在メロン部会の会員は8人、出荷量は1シーズンで4〜5千ケースとなっています。主力品種は、糖度が高くて人気のあるタカミメロン。私は春にメロン、秋にピーマンを栽培していますが、メロンはウリ科、ピーマンはナス科なので、交互に栽培することで連作障害を防ぐメリットもあるんですよ」

育てるのは1株につき4個だけ

メロンには、ツルを地面に這わせる地這い栽培と、支柱を立てて育てる立体栽培という2つの方法があり、タカミメロンは地這い栽培です。田内さんに栽培カレンダーを教えてくださいました。

まず1月上旬、温床線を引いた育苗ハウスで種をまき苗を育てます。それを2月初旬にビニールハウスへ定植し、摘心・整枝を行ない1株につきツルを2本だけ伸ばします。

黄色い花が咲いたら3月中旬から4月にかけて交配。1本のツルに3個ずつ、1株に計6個の実をならせます。その実が握りこぶしほどの大きさになったところで、



摘果した実

1本のツルから1個ずつ摘果。ちなみに、摘果したメロンは漬物にするとおいしいため、お裾分けするととても喜ばれるそうです。

一方、選りすぐられた1株4個の実には日に日に成長し、表面にネット模様が現れ、交配から約60日でお荷の時を迎えます。



メロンの花は黄色い



ネット模様ができる前の実の表面はツルツル

生産量日本一の茨城県

県内の主な産地と出荷量

